

作者未詳歌群の不統一性と連作原型の残存

——卷七雜歌部の羈旅歌類聚の場合——

高 橋 庄 次

万葉集の謎を解く鍵がその約半数を占める作者未詳歌群にあることをさまざまな場所で発言されてきたのは中西進氏である。⁽¹⁾ また作者未詳歌卷の現行配列がいかなる方針にもとづいてなされているかを追究されてきたのは伊藤博氏である。⁽²⁾ 中西氏の所説には現行型の奥に隠されている原資料の場に関心が注がれているのに対して、伊藤氏の所説には現行配列の編纂方針に関心が注がれているという相違が明瞭に見られる。だが伊藤氏も、「人麻呂歌集所出歌に配列の統一性が存するといっても、それが原歌集の体裁のままではない⁽³⁾ あるいはありうることは常に配慮をめぐらすべきであろう⁽⁴⁾」と、原資料への関心も添えておられる。すでに拙著で考察したように、志賀白水郎歌十首や讃酒歌十三首のような形態の明確な連作歌でさえ、その現行配列に乱れが認められる万葉集のこと

であるから、作者未詳歌群にあつては、なおさらその配列には慎重な注意を払う必要がある。そこでこの小論では作者未詳歌卷の卷七雜歌部の羈旅歌類聚をその対象に取りあげて考察してみたい。

この羈旅歌類聚が標目を立てて分類されているのは「芳野作」五首、「山背作」五首、「撰津作」二十一首のみで、あとは「羈旅作」九十首に一括されていることは周知の通りである。この羈旅作九十首の内訳は、阿蘇瑞枝氏によると「紀伊国二三首がもっとも多く、ついで近江国の五首、播磨・筑前の各四首、撰津三首、尾張・備後各二首のほか、常陸・相模・上総・伊勢・飛騨・若狭・河内・山城・大和など」⁽⁵⁾ 多岐にわたっている。したがって、羈旅作九十首のこれら紀伊国・近江国などが何故標目立されなかつたのか、また撰津国三首が何故「撰津作」

の標目下に入らなかつたのか、といった問題が必然的に諸家に指摘されることにもなる。篠原一二氏は卷七の左注などから、多くの原資料が使われていることと、不統一・未整理の状態とに注目されている。この問題について考えてみるために、先ず羈旅作九十首中からその一部分(一一九以下)を次に切り出してみる。

(A) ① 妹が門出入の川の瀬を速み吾が馬爪づく家思ふら

しも (一一九一)

② 白榜ににほふ信土の山川に吾が馬なづむ家恋ふら

しも (一一九二)

③ 背の山に直に向へる妹の山言聴せやも打橋渡す

(一一九三)

④ 人ならば母の最愛子そあさもよし紀の川の辺の妹と背の山 (一一九四)

⑤ 吾妹子に吾が恋ひ行けばともしくも並び居るかも妹と背の山 (一一九五)

⑥ 妹に恋ひ吾が越え行けば背の山の妹に恋ひずであるがともしさ (一二〇八)

⑦ 妹があたり今そ吾が行く目のみだに吾に見えこそ言問はずとも (一二一一)

(B) ① 足代過ぎて糸鹿の山の桜花散らずあらなむ還り来るまで (一二二二)

② 名草山言にしありけり吾が恋ふる千重の一重も慰めなくに (一二二三)

③ 安太へ行く小為手の山の真木の葉も久しく見ねば蘿生しにけり (一二二四)

(C) ① 玉津嶋よく見ていませあをによし平城なる人の待ち問はばいかに (一二二五)

② 潮満たばいかにせむとか方便海の神が手渡る海部未通女ども (一二二六)

③ 玉津嶋見てし善けくも吾は無し京に行きて恋ひましく思へば (一二二七)

(D) (一二二八～一二三二・一二九四・一二九五の藤原卿作の七首は省略)

歌脚の歌番号は国歌大観による。この国歌大観番号は寛永版本(及び活字付訓本)に従って付けられたもので、これが錯簡であったことは武田祐吉氏の論考で明らかである。つまり一一九三と一一九四番歌の間に一二〇八

一二二二の十五首が繰り上がる型が正しい。また右に掲出のA群④⑤⑥の三首の歌番号が前後しているのは、紀州本の順序に従った配列である。類聚古集と古葉略類聚鈔の古本も紀州本の順序に並べられているから、この④⑤⑥の配列が古型であったと考えられる。全註釈・私注・注釈・新潮古典集成・講談社文庫もこの配列を採用し

ている。ここに掲出した陸路の歌群の前に海路の羈旅歌群が置かれているのでわかるように、ここには明瞭な境界が認められる。しかも掲出の歌群は、A群七首・B群三首・C群三首・藤原卿作のD群七首という、まだら様の不連続性を見せている。これについて以下歌群ごとに考察してみよう。

先ずA群は大和から紀路を行く羈旅歌である。①の第一・二句の原文「妹門出入乃河之」は、「出入乃河」または「入乃河」のいずれを固有名詞と見ても、第一句を川の名にかかる枕詞ないしは序詞といった修飾句に解するのが通説である。しかしこの「妹門」は男の旅の出発点を示した言葉なのであって、単なる枕詞的修辭とは解せない。もし川の名が「入」だとすれば「妹が門出で」と、実意の本文が始まることになるし、川の名が「出入」だとすれば掛詞で実意の本文をつないだことになる。いずれにしても第一句は川の名の単なる入飾り句Vではあるまい。したがって実意の表現句「妹門」つまり入妹が家の門Vは、第五句の「家思ふらしも」の「家」と重なって来ざるを得ない。そうすると①②の二首は〔第一図〕のような有機的構造の二首対を形作っていたことになる。

この図でもわかるように、①②の下句は全くの類句の

下 句			上 句		
②	①	c 句	②	①	a 句
吾が馬なづむ	吾が馬爪づく		白袴ににほふ	妹が門出で	
		d 句			b 句
家恋ふらしも	家思ふらしも		信土の山川に	入の川の瀬を速み	

〈Ⅱ〉

〈Ⅰ〉

【第一図】

繰返しになっており、共にc句はb句に裏打ちされながら主想のd句を導き出す関係になっている。とすると①②のa句も、これに微妙に重なってくることになる。佐藤忠彦氏が「妹が門」という言葉について、「妹がそこで自分を恋い慕って悲しんでいる所であり帰るべき自分の領域を示す懐しいもののイメージを持ったもの」という場面性を指摘されているように、①のa句は、女が、旅立つ男を門に立って送る過去の場面性を含みもっているのである。だから②のa句「白袴ににほふ」の表現には、男を送るために門に立って白袴の袖を振った妹のイメージが連想されていたはずなのである。①②のa句が、主想の①②のd句「家思ふ恋ふらしも」にぴったりと重なって行くのはそのためである。二首対の緊密な

歌構造がここから鮮やかに見えて来よう。言うまでもなく旅行く男の、家の妹への恋がこの二首対の主題である。この二首対①②は「妹が門→入の川→信土の山川V」という旅の道行を表現しながら、次の③④以下の紀の路に入り、紀の川の兩岸に向い合う妹背の山に託してこの主題が歌いつづけられる。

③は妹背の山が「直に向へる」幸福な構図を表現した歌だが、次の④はこの③と同じ構図を④の下句で「紀の川の辺の妹と背の山」と繰返す型になっていて、③④は切り離せない関係を作り出している。つまり④は、③の幸福な構図を下句にして、それに上句を新たに付け加えた関係にはかならない。もちろんここには、旅行く自分の境遇がその背後にある。だから、この幸福な妹と背の山の二首対③④を承けて、次の二首対⑤⑥ではそれに、妹と別れて旅する自分の苦しみを対置させて歌う。④の結句「妹と背の山」を⑤の結句に繰返した二首対同士の移りにも注意したい。この二首対⑤⑥は類想歌の繰返しだが、それもただ繰返すのではなく、「第二図」のように変奏している。

つまり図Ⅰの上句では、bcをcbに組み替えた上、aの「吾妹子」を「妹」に約めた分だけdの「行けば」に「越え」を付け加えて表現を増幅させている。図Ⅱの

下 句		上 句	
⑥	⑤	⑥	⑤
背の山の妹に恋ひずてあるが	ともしくも	妹に	吾妹子に
ともしき	並び居るかも妹と背の山	恋ひ	吾が
		吾が	恋ひ
		越え行けば	行けば

〈Ⅱ〉

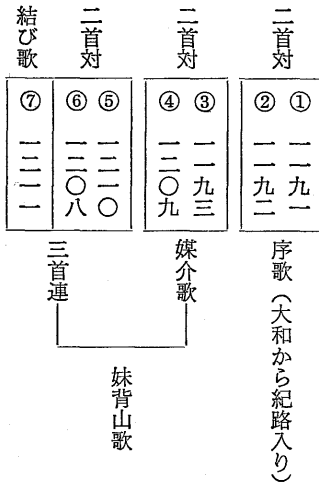
〈Ⅰ〉

【第二図】

下句では、fの「並び居る」と「恋ひずてある」とは類似の内容を繰返したものであるからf同士は類想句であることがわかる。二首対におけるこのような類句の組み替えによる変奏法が万葉歌にしばしば見られることは、すでに拙著で述べた通りである。とにかくこの二首対⑤⑥の対置詠法による「ともし」の主想の表現が、前の二首対③④の幸福な妹背の山の構図から導き出されていることが容易に理解できよう。

次の⑦の上句は明らかに二首対⑤⑥の上句を承けた表現であり、また⑦の下句の主想「吾に見えこそ」の切実な願いも、二首対⑤⑥の下句の主想「ともし」の感情が増幅された当然の帰結として納得の行く表現である。つ

まり⑦が二首対⑥⑦を括って三首連を構成しているというところにほかならない。一般に連作詩歌がこのような二首対と三首連とを基本単位にして組み立てられていることは、すでに拙著でその由来・構造・機能などについて詳述したので、ここでは繰返さないが、とにかくこのA群が〔第三図〕のような構造をもつ連作歌であったことは間違いない。



【第三図】

A群に〔第三図〕のような典型的な連作構成が見出せるということは、この七首が原資料から連作形態のまま羈旅作九十首の中に取り込まれてきたことを意味する。作者未詳歌巻の類聚の標目下に連作形態をとどめた、これは数少ない例と言えよう。だが、このA群七首が原資料の連作完結態であったか、あるいは原資料の連作完結

態からその一部分が切り出された残欠であったかは明らかでない。

さて、それではB群の三首はどうか。この三首にはみな地名が詠み込まれているのでそれを先ず比較してみると、①の「足代」はアテと訓むのが通説であり、③の「安太」は、アタ・アダと訓む説と、アテと訓んで①の「足代」と同地名とする説とがある。だが、「足代」も「安太」も共にアタ（アダ）・アテの両方に訓めるのであって、名義抄の音字によると両方ともアタ（アダ）の訓みのほうに傾くが、もちろんアテと訓む可能性も十分にあり。いずれの訓みにしてもB群の①③④の二首を〔第四図〕のように比較してみると、「足代」と「安太」が同地名であった可能性はかなり大きいように思われる。

下 句		上 句		
③	①	③	①	
久しく見ねば蘿生しにけり	散らずあらなむ還り来るまで	安太へ行く	足代過ぎて	第一句
第四・五句（主想句）		小為手の山の	糸鹿の山の	第二句
		真木の葉も	桜花	第三句

【第四図】

図Ⅰの上句を見ると、先ず第一句は「足代・安太」の地を「過ぎて・へ行く」で対応し、第二句が山名で対応し、第三句がその山の△花・葉△で対応していることがわかる。そしてこの花と葉から、図Ⅱの下句の主想が導かれている。この主想句を比較してみると、③の△久しく見ないうちにすっかり薙が生してしまっただ△という感慨は、①の△散らないでいておくれ私が帰って来る時まで△の主想の前に来なければならぬだろう。なぜなら、この①③の主想句は場所と対象を異にしながら、共に時間の推移を共通の主想にして歌っているからである。とすれば、第一句も逆になるから、この①③の二首は③①の順序が正しかったことになり、したがってその道行は

安太へ行く小為手の山 ↓ 足代過ぎて糸鹿の山

の順序になる。「安太・足代」が同じ地名であったとすれば、これはまことにすっきりした道行径路になる。

この③①の間に置かれている②の「名草山」は紀三井寺の山とすることで諸注一致しているから、この②が前であれば、現在の有田市に属する「安太・足代」の③①二首がこれにつづくことになる。つまり②③①の順序に①を繰り下げれば連作三首連(導入歌②と二首対③①)の形態になり得るということである。しかしそれは、原資料の連作形態から切り出された二首対③①に、別歌②が混

入した結果であったかもしれない。いずれにしても③①が原型の二首対であった可能性は極めて大きく、この二首対が分散してしまった現行型のB群の配列は、統一性を欠いたものと言わざるを得ない。

次のC群の三首では、同じ玉津島を詠じた①③が先ず目につく。①は典型的な△問歌△の表現になっているのに対して、③はそれに答える型の表現に仕立てられている。この①③の二首を(第五図)のように比較してみると、それが一層はつきりする。

上 句		下 句	
①	玉津嶋	①	あをによし
③	玉津嶋	③	京に行きて恋ひまく思へば
	よく見ているよ よく見ているよ		平城なる人の待ち間はばいかに
	見てし善けくも		吾は無し
	第一句		第三句
	第二句		第四・五句
	第三句		
	<Ⅰ>		<Ⅱ>

【第五図】

図Ⅰ上句の①③を比較してみればわかるように、先ず①で△玉津島をよく見ていらっしやい△と言えは、③で△玉津島を見ても私にはちっともよいことはない△と答える問答の呼吸がぴったり合っているのである。しかも

①③の第一句が同句、第二句が「見て」を「見てし」、「よく」を「善けくも」と承けて完全に対応している。Ⅱ下句の①③も、「平城」を「京」と承け、「待ち」と「行き」とを対応させて、上句の問と答の理由づけをしている。こうしてみると、C群の①と③は問答の二首対だったのではないか。おそらく原資料には、①③が問答二首対の型に組み合わせられていたものと考えられる。したがって②は、この問答二首対の間に他から混入した歌であったということになる。①③が問答二首対原型であったと考えられるだけに、そこに②が混入した現行配列を合理的に説明する手だてはないであろう。このC群の三首にも不統一性は顕著なのである。

このように、作者未詳のA類聚Vの歌巻では、現行配列のままで一連性を考えることはかなりの危険性を伴うものであり、慎重さが要求される。作歌事情などを示す題詞でも備えていれば、その題詞に括られた範囲で一連性を考えることは可能だが、その題詞もなく、さらに決定的なことは、それがA類聚Vであるということである。歌のA類聚Vとは同じ種類の歌のA群V（構成をもちたい集團）のことであるから、当然その類聚には題詞に代る標目立が必要になる。巻七の雑歌部を対象にして言えば、羈旅歌の類聚標目のもとに並べられた歌はA構

成Vを前提にはしていないということなのである。角度を変えて言えば、A類聚Vに徹すれば逆に連作原型は解体される。それならば、先程のB群C群の場合はこのA類聚Vによる解体現象だったのであるか。ことはそう簡単には割り切れまい。現行型の配列には、幾度となく幾人も手が加わって来た結果ではないかという疑いもあるからである。左注のさまざまありようなどにも、それが感じられる。現行型の成立を、万葉集の成立とイコールで結んでよいものかどうかという重大な問題もそれは孕んでいる。

先の掲出歌末尾部D群（省略箇所）の七首にあっては、左注に「右七首者藤原卿作」とあるにもかかわらず、ここには一連性が認められない。このD群七首から地名だけを順に抜き出してみても、A黒牛の海・和歌の浦・由良のみ崎・玉津島・雑賀の浦・妹背の山Vというように、そこには一連性も構造型も認められないのである。以上のように、前掲のA群には原資料の連作形態の全部あるいは一部の姿をとどめているのが認められたが、B群とC群には、連作形態を成していたと思われる原資料から、一部分が断片的に切り出されて、類聚の中にその配列さえ乱して紛れ込んでいるのが見られた。D群では原資料が連作構成をもっていかどうかさえ疑わし

い。このように、掲出の歌群は紀伊国の羈旅歌類聚として一様に配列されているように見えながら、その実はABC群といったさまざまな様態を見せる不統一性が顯著であることをここで確認しておかなければならない。

武田祐吉氏は万葉集の用字の面から、一様に配列された歌群にも不統一性があることを指摘され、その一つの原因として、異なった資料の原物を継ぎ合わせることによって生じる不統一を推測しておられる⁽¹²⁾。用字からの推測としては、これは当然考えられることである。だがB群C群のような場合は先程も述べたように、その事情は複雑である。

中西進氏は宴席歌について、「短歌の連鎖という形で一つの文芸様式を作り出していると考えられるが、それはすでにわれわれには事情を知る手段もなくなってしまう歌群の中にもあるのではないか」と言われ、卷十雑歌部に見える類聚標目「詠鹿鳴」十六首の一群の中に散在する二一四七・二一四九・二二五二・二二五四の四首をあげられて、「これらは単に類想たるを越えて一連の作のように思われ、卷十のみならず作者未詳歌の中には、このような連衆の作が紛れ込んでい⁽¹³⁾るであらう」とことを示唆しておられる。先程考察したB群中の一組の二首対やC群中の一組の問答歌のように、原資料の連作形態

の一部分をすくい取ることが可能であっても、完全な原型を捕捉することの難しさがわかる。一つの連作原形が、異なった類聚歌群に分割されている場合もあるからである。また卷三の挽歌部に収める旅人の連作「思恋故人歌」十二首の場合のように、卷三が編年体に編まれたために、神龜五年の条の三首と天平二年の条の九首とに分割されてしまっている作品もある。旅人の原資料には連作十二首としてまとめられていたはずだが、これが記名歌であったことと、具体的な左注が付けられていたことによつて、完全な原型を推定し得た稀な例である。だが、先程の考察でも明らかのように、作者未詳歌群にあつても、原資料の連作完結態に近い原型と思われA群のような場合もある。

同じ羈旅歌類聚の「撰津作」の標目下に並べられている二十一首の中にも、それと覚しきものが見出せるのは注目される。その中程にある次の五首がそれである。

①めづらしき人を吾家に住吉の岸の黄土を見むよし
もがも(一一四六)

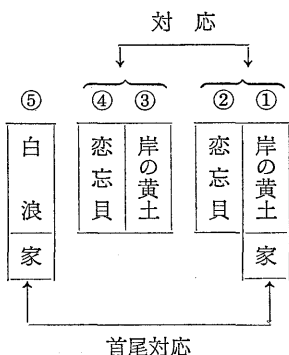
②暇あらば拾ひに行かむ住吉の岸に寄るといふ恋忘
貝(一一四七)

③馬並めて今日吾が見つる住吉の岸の黄土を万代に
見む(一一四八)

④ 住吉に行くといふ道に昨日見し恋忘貝言にしあり
けり (一一四九)

⑤ 住吉の岸に家もが沖に辺に寄する白浪見つつしの
はむ (一一五〇)

右の歌は①～⑤のすべてに「住吉」の地名が歌いこま
れているだけでなく、この住吉歌五首の前には「血沼の
海」(一一四五)の歌があり、後には「大伴のみ津」(一一
五一)の歌があつて、この住吉歌五首のまとまりが際立
っている。しかもこの五首の主素材を取り出してみただ
けでも、〔第六図〕のような構成的なまとまりが見られ
る。



【第六図】

この図からすると①②の二首と③④の二首とが対応関
係をもつことになるが、これは拙著ですでに述べた並列
型の贈答パターンと同じである。もちろんこれだけでは

なんの説得力ももないから、具体的に作品内部にメス
を入れて、その有機的一連構造の有無を検証してみなけ
ればならない。

先ず①は「住吉」の地名が掛詞になっていてへめづら
しき人を吾家に(迎えて)住み吉しVとかかる。これは住
吉の地名を修飾する単なる序詞ではなく、実意の文脈を
作っていることに注意しなければならぬ。「めづらし
き人」は恋人を指しているのだからこの①の上句は明ら
かに歌主の願望を表わしている。つまりへいといし人と
共に幸福に住む家が欲しいVという願望であり、それが
地名にかけたへ住み吉しVの意にこめられているのであ
る。この願望は末尾歌⑤の上句「住吉の岸に家もが」の
願望に承けられて住吉歌一連の主題を形成しているか
ら、この五首の「住吉」はスミノエではなくスミノシと
訓んでいた可能性が大きい。この①の上句の願望は、下
句でへ住吉の岸の黄土をいといし人と共に見る手だては
ないものかなあVという願望に具体化されている。つま
り①はへいといし人と一緒に幸福に住む家を住吉の岸に
持つて、黄土を共に見る手だてはないものかVというこ
とにはかならない。この願望は実現不可能な全くの夢に
すぎないから、次の②でへ住吉の岸に寄るといふ恋忘貝
を拾いに行こうVという恋の苦しみ切なきの表現に直結

することになる。だが、この②には「暇あらば」という仮定条件がついているから、これも現実のことではなく、恋の苦しみだけがそこにある。

このような①②の非現実の願望に対して、次の③④では現実の行為が歌われる。これは非現実と現実の、歌主の立場の相違を示している。この③④で特に注目されるのは、③が「今日」という現在形で表現されているのに対して、④が「昨日」という過去形で表現されていることである。つまり③④の関係を住吉の地点に絞って要約してみると、△③今日住吉の岸の黄土を見た、④昨日ここ住吉に来る途中で恋忘見を見た▽という二首対になっているわけである。この二首対③④と先程の二首対①②との対応関係を見ると、①が△黄土を見る手だてはなにか△と非現実の願望を歌ったのに対して、③は△その黄土を今日わたしたしは見た▽と現実に見て答えている。また②が△恋忘見を拾いに行こう▽と非現実の願望を歌ったのに対して、④は△その恋忘見を昨日わたしたしは見た▽と、やはり現実に見て答えている。だが、恋忘見を見たと言っても、それは名ばかりで、恋の苦しさは消えていない。立場を異にしたこのような二首対の対応関係からすると、①②が女の贈歌で、③④が男の答歌と解する以外にないであろう。それでは⑤はどうか。

⑤の上句「住吉の岸に家もが」の願望表現は、明らかに①の願望を承けた結びの主題表現である。ここにも①と同様△住み吉しの家▽という掛詞的な意がこめられている。そしてこの上句の願望が、もしかならぬたら、△沖に立ち岸辺によせる白浪を一緒に見ながら賞美しようものを▽とその下句で歌う。こうしてみると、上句の「住吉の岸に家もが」の「家」は、①で歌われた女の非現実の家を指していたことになる。つまり女歌①の非現実の願望を承けて、△そうであつたらいいなあ▽と言って歌い収めたのが、この⑤の歌であつたらう。

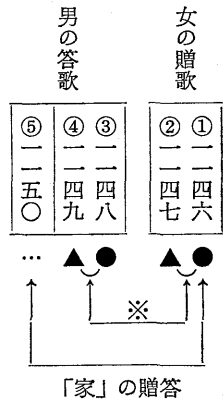
住吉の岸の

①黄土を 見むよしもかも
⑤白浪を 見つつしのはむ

【第七図】

今この⑤の歌と①の歌とを比較してみると、〔第七図〕のような歌句の対応を示していることがわかる。①の「見むよしもかも」には、その場から遠く離れた所での願望を感じさせるが、⑤の「見つつしのはむ」には、その場に立っての願望を感じさせる。①が女の歌であつたとすれば、⑤は男の歌でなければならぬだらう。したがって、この住吉歌五首は〔第八図〕のような並列型対応の贈答構造で組み立てられていたことになる。

おそらく女の贈歌は住吉へ旅立った男を恋うて歌った



【第八図】

※●印は「黄土」をめぐる贈答を示し、▲印は「恋忘貝」をめぐる贈答を示す、並列型の対応である。

ものであり、男の答歌は住吉の地でそれに答える型で歌ったものであろう。女が①で「めづらしき人を吾家に住吉の岸」と歌い、男が⑤で「住吉の岸に家もが」と歌っているところからすると、この男女は住吉の岸辺に二人だけが住む△家▽というユートピアを想い描いていたようである。①の「黄土」と⑤の「白浪」は、この夢の△家▽を美しい色彩と光で包みこむ素材であった。住吉のこの黄土と白浪は巻六の車持朝臣千年の長反歌にも次のように歌われている。

(前略) 月にけに日に日に見とも 今のみに飽き足

らめやも 白浪のい咲き廻れる住吉の浜(九三二)

反歌一首

白浪の千重に来寄する住吉の岸の黄土ににほひて行

かな(九三三)

長歌では白浪が花の譬喩で美しく歌われており、その

白浪の表現を承けた反歌における黄土の色彩の映発がまた美しい。

住吉歌五首の①⑤は、このような黄土と白浪とで△家▽を夢のように彩ったのである。かかるユートピアを男女が想い描いたのは、万葉時代の恋の障害の厳しさを示しており、そういう状況から生れたこれは幻にはかならない。「恋忘貝」はその恋の苦しさを表現する素材であった。換言すれば、男女双方が恋忘貝を求めたくなるといふことである。それにしてもこの男女が想い描いた△家▽がなんとも美しい。住吉歌五首は実際に贈答された歌ではなく、贈答の型に仕組まれた物語歌だったのでなかろうか。

以上の考察から、住吉歌五首はおそらく原資料の連作原型であったと思われる。「撰津作」二十一首の羈旅歌類聚の中に紛れ込みながら、その原型をとどめた、これは数少ない例と言えよう。この小論では巻七雑歌部の羈旅歌類聚を対象に考察したが、他の作者未詳歌巻の類聚にも同様のことが言えるはずである。つまり巻七・十・十一・十二の作者未詳歌巻の類聚には不統一性があった、それを現行配列のままて安易に連続解釈することには危険性があるということである。それは、連作原型の

断片が分離散在する「羈旅作」九十首中のBC群の例を見て明らかなことであろう。だが、かかる不統一の類聚の中にも、羈旅作九十首中のA群（妹背山羈旅歌七首や撰津作二十一首中の住吉歌五首のように、連作原型に近い作品がそっくり混入している場合もあることに注意しなければならない。

なお、巻七・十・十一・十二の作者未詳歌巻の次に置かれていた巻十三は特殊な歌巻で、前四巻と同様には論じられない。巻十三については書き下ろしで近く刊行の予定である。

注1 中西進氏著『万葉集原論』他。

2 伊藤博氏稿「正述心緒の配列―女の歌と男の歌―」(『日本古代文学論集』所収) 他。

3 伊藤博氏稿「万葉歌の配列―人麻呂集『春雑歌』をめぐって―」犬養孝博士古稀記念論集『万葉その後』所収。

4 拙著『芭蕉連作詩篇の研究―日本連作詩歌史序説―』第三編第一章「万葉集の連作歌」のⅠⅡ。

5 阿蘇瑞枝氏稿「万葉集羈旅歌の世界」『論集上代文学』第八冊。

6 篠原一二氏稿「巻七論」春陽堂版『万葉集講座』第六卷。

7 武田祐吉氏著『万葉書志』「巻第七の錯簡」(武田祐吉著作集第六卷所収)。

8 佐藤忠彦氏稿「門のイメージ」大久保正氏編『万葉とその伝統』所収。

9 拙著(注4)の第三編第一章のVI。

10 拙著(注4)の第三編「連作詩歌の源流」。

11 記一〇一(大系本歌謡番号)でもその二句対で「そが葉の広りいまし／その花の照りいます」というように、葉と花を対にして謡っている。

12 武田祐吉氏著『万葉集校定の研究』「万葉集の成立」(武田祐吉著作集第六卷所収)。

13 中西進氏稿「万葉集の歌体と様式―詩の方法―」『万葉集研究』第四集。

14 扇畑忠雄氏の八首原型説と伊藤博氏の十一首原型説、および十二首原型の私説がある。

15 ①歌の前におかれている「血沼の海」の歌一―四五の「妹がため貝を拾ふと」の句は家菑の貝であるのに対して、この一連②④歌の「恋忘貝」は恋の苦しさを表現するための素材として使われていて発想が異なる上、歌の内容も不連続である。したがって一―四五番歌はこの住吉歌五首一連とは無縁の別歌と見ていい。またこの住吉歌五首の前後には数首の住吉の歌が散在するが、内容的にも構造的にも不連続であることに注意しなければならない。

16 (注9)に同じ。

17 「中古の用例では入江の名にはスミノエ、郡名または神名としてはスミノシと区別があった。上代でも住吉とあるものの一部はスミノシと読むべきものがあるかもしれない」〔小学館版全集』『万葉集(2)』地名一覧〕。

18 ①の歌主について、金子評釈が女歌とするほかは、全釈・注釈・新潮古典集成など男歌とする。私注は「表現は女の立場からであらう。しかし全体は寧ろ男の立場らしい。」と、どちらにもとれる解を示す。②の歌主については金子評釈が男歌とするほかは、はっきりした指摘はあまり見られないようである。

19 私注の①歌の評「陳腐な著想」、②歌「ありきたりの言葉の寄せ集め」、③歌「類型に終った」などに見られるように、一般にこれらの歌に対する諸家の評はよくないが、これは一首を孤立させて解釈するからである。この五首は贈答連作構造の中で生きている歌なのである。住吉歌五首は古歌の類型句によって組み立てられた物語歌であつたらう。